

平成二十五年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二四号 抜刷

村山知義の転向小説（1）

―「帰郷」「何田勘太シヨウ」「樁の島の二人のハイカー」―

尾 西 康 充

村山知義の転向小説（一）

——「帰郷」「何田勘太シヨウ」「椿の島の二人のハイカー」——

尾西 康 充

村山知義の単行本『白夜・劇場』（一九三五年五月、竹村書房）は、「白夜」「帰郷」「何田勘太シヨウ」「椿の島の二人のハイカー」「母の手紙」「女史」「劇場」という七編の短編小説を収録している。「文芸通信」第二卷第八号（一九三四年八月）に掲載された村山の「帰郷」の批評評¹は、「帰郷」について発表された岡田三郎、戸坂潤、武田麟太郎、豊島与志郎、広津和郎、永井龍男、今日出海、大類豪、本庄陸男たちの創作評に対するコメントである。村山によれば、「私はこの小説で、襲ひかかるあらゆる恐ろしい事実の堆積の中に揉みくだかれる一人の非常に忠実な労働者の姿——かういふ人達を現代はどんなに多く生んでゐるか——を描こうとした」という。そしてつぎのように作品のテーマが語られる。

彼はほかの原因もあつたが主として階級的に忠実なるが故に狂氣し（この狂氣の原因については或る事情から書くことが不可能である）一度なほりながらもまた狂氣する。しかしなほ運動を続けようといふ氣持はその狂つた頭を支配して

ゐる。彼は意志する。だが現実は無慈悲にそれをばばみ、彼一箇人に関する限り、事は絶望的な悲劇に終わる

「階級的に忠実なるが故に狂氣」におちいつた主人公内田啓介が再び運動を続けようとするものの、「現実」は「無慈悲」にそれをばばんだ。しかしその「現実」とは何か。再起を期そうとした運動家の前途に立ちはだかつた「現実」がどのようにとらえられているかをみることは、転向者の心理描写によつて転向小説が評価されてきたのとは異なる評価軸を考える手がかりになると考えられる。これは、榎原修氏が村山の「白夜」に関して「この作品が転向心理の説明、あるいはいいわけとして書かれているのではなく、転向した村山の現実の総体に触れようとする企図を持つものであつたことは認めてよい」と指摘していることに通じる²。

転向者の個人的な心理ばかりに眼を向けるのではなく、無産主義運動にとつての（敗北の季節）において、どのような社会

認識が作品のなかに示されていたのか——以下、「白夜」は別稿に譲つて、『白夜・劇場』に収録された小説を取りあげ、村山の転向小説の真価を問うてみたい。

一 「帰郷」

1

「帰郷」は「改造」第一六卷第八号（一九三四年七月）に発表された。この作品は、東京のF病院から退院した内田啓介が瀬戸内海に浮かぶS島のH村に帰郷する場面からはじめられている。啓介は五年前の九月東京で検挙され、一月T刑務所の未決監に収監され、一年半を過ごした後、懲役四年の実刑判決を受けた。「去年のおそらく初めまで」は服役していたが、「重い神経衰弱から精神の一時的障害」を引き起こし刑の執行停止となつてF病院に送致されたのであつた。「四月初めの微風」の吹くなか「三百噸の瑞宝丸」に乗つた「二十人あまりの船客はみな下の船室」に籠っている。甲板には啓介ただ一人——「色が気味の悪いほど白く、頬がえぐつたやうにこげ、顎をけづりとられたやうな小男が、一見、保険会社の勧誘員のやうなくたびれきつた紺色の背広の風態で、風に飛ばないやうに眼の上深く黒いソフトをギユツと引きさげて、そのために一層鼠の様な感じをきわだたせて立つてゐるきり」であつた。

啓介が生まれてから一四年間育つたH村には、啓介とは一〇年間会わない父信蔵と、五年間会わない啓介の息子繁樹が住ん

でいる。S島は地勢氣候の關係上良質な醤油の産地で、信蔵も村人七人と共同出資して醸造所を設立した。しかし「関西の金持ちたち」が投資して丸八醤油醸造会社が発立され、昨春信蔵の規模の小さな醸造所は倒産し、「建物のわづか一部分だけを小人数で使ひ、地所も財産もいれあげた父自身、そこで働く労働者になつて了つた」。大資本に圧倒される地方の小資本の弱さが浮き彫りにされ、伝統的に「半農半漁」の生活を送つてきた島民たちが投資熱に浮かされた挙句、「労働者」に没落してしまふという資本主義の現実が描き出されている。

境遇の変化は、信蔵にとつて性格の変化をもたらすことにもなつた。「莫迦にできぬこすさ」を持ち合わせた「典型的なS島人だつた父の温和さ人の良さ」は「家業の没落につれて、女々しく神経質でやりきれぬほどのうさひ性質にかわつてきた」という。

啓介の母は彼女にとつてはむしろさいはひに家業の没落を見ないで死んだのだが、父の関心はそのために一人子の啓介に絶え間もなくまつはりつき、事業の失敗にうながされたためあらゆるが、啓介の現在や将来のために綿密きわまる計画をつくりあげて彼に迫り、その些細な点で啓介なり事情なりが齟齬すると全計画が彼の手から抜け落ちたと失望し悲嘆して、小さな子供である啓介をつかまえて、或ひは罵り、或ひは皮肉を投げ、或ひはかげぐちをきき、啓

介は父のこの感情の奔騰からのがれるすべはないのである。

失敗を繰り返させるまいと焦るあまり、周到に考えた計画通りに啓介を歩ませようとする——このような信蔵の強迫的な態度を前にして、啓介は「自分が父にとつてまったく不満な子であり、自分の一挙手一投足が父の不幸のみなもととなるしかない」と考え、やがて「父にたいする冷い敵意」を持つようになった。小学校を卒業して「大阪で小さな石炭商をしてゐる遠縁の親戚」のもとに預けられてから、啓介は信蔵と「三四度」会つたが、H村に帰ることはなかつた。信蔵もまた、啓介が自分の思い通りにならないと分かると「心から啓介を憎悪」しはじめたのであつた。

帰郷した啓介は、「これまでの経験で彼は現実の事情といふものはいつもどたん場になるとどんなおそろしい予想よりもつとおそろしいものとなつて現はれてくるものだといふことを知つてゐた」。予想外のできごとが発生するのを恐れながら実家の門口に立つた。

そしてここで彼のおそれ（それはまだ何かの予想を練りあげるだけの余裕もなかつたので、あらゆる予想を越えたおそろしい現実が起るのだといふ漠然たるおそれに終始したのだが）は実現されたのであるが、それはこの小説が終りまでかかつて述べるところである。

右のような重要な伏線が第一章の終りに語られる。「あらゆる予想を越えたおそろしい現実」とは何であつたのか——。

2

信蔵は孫の繁樹を前に、啓介の別れた妻フミエの悪口をいう。しかし繁樹にとつて、信蔵が「母を罵つたあげくには必ず感傷的になつて父を憐はれむのだが、それは本当は父に心を寄せるのではなく、ただ母をますますくさし、母が自分の家と自分と子と孫とに加へたげがらしい軽蔑に復讐する」ためであるのを知つていた。信蔵は「つれ合ひがつかまへられて牢屋でくらしんどるときに、今こそつれ合ひのためにつくして苦しみを少しでも軽うせんならんときに、どうぢや、生白い馬の脚とかかわりあうて、牢屋のなかのおやぢを苦しめ抜いたんぢや」と吐き捨てるようにいう。しかし啓介の無産主義運動を理解しているわけではなく、フミエに「復讐」するために語っているのにすぎなかつた。

「芸術の中でも芝居の嫌ひな啓介の反対を押し切つて」舞台に立つことになつたフミエは、啓介が検挙されて三年目（昨年）の冬に、芝居仲間の仲島という男性のもとへ去つた。啓介は自分の発狂の原因がフミエと仲島にあると思つてゐた。しかし作品の語り手は、それが「原因の一つ乃至は直接の動機」になつたことはたしかだが、まだ啓介が「自覚」できていない「真実

の原因はもつと深いところにあつた」とする。それこそ第一章の終りに語られた「あらゆる予想を越えたおそろしい現実」に重なるものであつた。

作品の語り手によれば、啓介ほど「自責の念の強い男」は珍しく、この点では「信蔵と啓介には共通した感情のはげしさや計画にたいする熱情」がある。それが信蔵の場合には「一人子にたいする度はづれの干渉」として、啓介の場合には「彼自身を責めて欠点のない闘士に責め上げようとする熱情」として現れたという。

啓介が無産主義運動にかかわりはじめると、「自分をいつまでも地区の行動隊に押しつけてゐるものたち」に対して「眼のくらみさうな反感」を抱き、「ねっこい反感から策動さへ」企てたこともある。しかしその「策動」が「運動にもたらした害悪が如実に見」えると、「結局自分が行動隊的の仕事以上に出られない素質」であることを受け入れた。それ以後は「下積みの仕事にけつして不満を感じず、また個人的生活においても嚴重に欠点のないものに自分を鍛えあげること」に集中し、ロシアの革命家ピアトニツキー（Osp Aronovich Plautski）に「熱狂的に傾倒」しながら「激烈な自責の日々」をすごした。その結果「下積の仕事の中でも最も危険な仕事」「最適者」としていいよいよ彼の上に落ちかかってくる」ことになった。

信蔵が獄中の啓介に差し入れもせず手紙も書かなかつたのは「啓介のことを思はなかつたからでも、また受くべき罰を身に

泌みさせるためでもなく、ただおそろしかつたからに過ぎない。すべて警察とか裁判所とか刑務所とか云ふものは考へただけでも身の毛がよだつ」のであつた。啓介がF病院に入院していた今年の正月、信蔵は「拝啓啓啓父上にはいろいろの御迷惑惑惑御面倒をおかけしたことをと思ひ考へます私小生自分はまつたく全然快癒全快なほりましたから何卒どうぞどうか一日も早く速やかに即時にお引引取取においで下さい」という言葉ではじまる錯乱した手紙——「半紙に鉛筆で一めんに字を書いたもの」——を受けとつた。そこで「二晩ねむらずに思ひなやんだすゑに」上京してF病院に出かけていった。「チヨビ髭を生やした美男子の若い医者」が説明するには、啓介は「もともと心身が衰弱してゐたところへながい刑務所生活のうちに重い神経衰弱から被害妄想狂となり、幻聴が聞こえだし、眼に見えぬ望楼のやうなものから、同じく眼に見えぬ屈折反射望遠鏡のやうなもので彼にたいして悪意を持つ或る人々が彼を観察してゐたが、やがてその人々は電流でもつて彼の思想を自由に左右すると想像するやうになつた」という。そして「若い医者」は、啓介が発症した統合失調症の症状を詳しく説明する。

ところがそれがやはりああいふ思想を持つた人だけに啓介君のは、われわれにもハッキリせんのですが、望楼の上にか政府の最高幹部のやうな者がゐてすな、啓介君は

それをいつも、最高幹部、最高幹部と云つてゐましたがな、それが病院のわれわれ、医者ですな、それと連絡を取つて、何か電流で啓介君の心を勝手に支配してゐるといふやうに思ひ込まれたんですな、それで去年の十一月の末でしたか、私は回診に行つたときに不意に首を締められたことがありましたよ。

啓介は「最高幹部」によつてつねに監視されているという迫害妄想を抱いている。啓介にとつて「最高幹部」とは、超越的な場所から主体を選びとる絶対者——精神疾患を発症した啓介の場合、運動家を摘発する特高警察の組織であれ、思想犯を独房に拘禁する司法組織であれ、精神病者を閉鎖病棟に監禁する行政組織であれ、さらには「最適任者」として自分に「下積の仕事の中でも最も危険な仕事」を与える党組織であれ、おそらく等価のものとして感じられている——のである。

異常な行動をみせる啓介は、布団や着物を糞尿で汚すことを恐れて「裸の臀部」をいつも布団の外に出して寝ていたり、排尿の際「オマルの外へこぼすといけない」と思つて過度に心配していたりする。普通は理解できないほど、自分が周囲に迷惑をかけている——主体が他者に被害をもたらしている——と思つているのは、ある意味において独特の不安を孕んだ誇大感ともいえる。新宮一成氏は「主体が拡張し他者を吸収してしまふか、他者が主体を圧倒し消失させてしまふかどちらか一つの

可能性しか提供しない」精神状態を「分裂症妄想」に特有の「主体と他者の無限循環」と呼ぶ。そしてこの「主体と他者が相互に入れ替わる無限循環」を「一点に凝縮させるもの」として、「負荷性」という契機が妄想野に出現するという。啓介の「裸の臀部」は、非合法の運動が「頭隠して尻隠さず」の状態であつたことや、任務が危険であればあるほど「尻をまくる」決意で臨んだことや、運動のためには妻でさえ「尻目にかけてない」態度であつたことなど無意識下に抑圧されていた意味群が暗示されていたのである。

3

啓介の異常な性向は、獄中の啓介のもとに届いたフミエからの手紙のなかにはつきりと指摘されていた。

あなたは長い間の努力ののちにたうたう運動のための完全な自己犠牲に到達されました。あなたはピアトニツキーに夢中でしたね。私もまたさういふあなたの妻であることに大きな満足と誇りを感じてゐました。だが、危険な仕事の連続と營養の不足と過度の緊張のために、あなたの身心は衰へ初めました。あなたは危険を必要以上に意識して過度の緊張をよびおこすやうになり、またおそらく自責のほげしいあなたはこの気持を自分が臆病なからだだと考へて、かへつて進んで危険を冒さうとしたので衰弱をはやめると

いふ結果になつたのではないでせうか。

啓介は自責の念が強迫衝動として、過酷な「仕事」を求め、切り詰めた生活を強いるようになった。それは次第に、度外れたものになつて、フミエとの夫婦関係を破滅に導いたのであつた。フミエからの手紙は、つぎのように続く。

そのころからあなたの自責、私行上のきびしきはまつたく度はづれなものとなつてきたのです。正しいものだからと思つて私もつとめにつとめたのですが、あなたの私に要求なさる道徳上の純潔さ、規律といつたやうなもの重さに私はまつたく苦しい日々をすごさねばならなくなりました。(中略)しかし繁樹も生れてくれば私は消費組合の仕事の方も切りつめねばならず、こまごました家事に追はれ、私の運動はだんだんと私自身直接にやるのではなく、あなたをとほしてだけ、間接になしとげられるといふことになり、あなたに依拠するところが多くなればなるだけ(ちよつと云ひ方がよくわからないのですが、私は運動の上ではただあなたが充分運動できるやうに援助するのだといふ部分が私の生活の上で大きくなればなるだけ)あなたの夫婦観は私にとつて淋しく暗いものとなつてきたのです――

この手紙を獄中で受けとつた啓介は、それを「憤怒と軽蔑」

をもつて読み、フミエの主張に耳を貸そうとはしなかつた。「淫奔を我儘をしやれた言ひ廻しで合理化してやがる」としか感じなかつたのであるが、フミエにとつてみれば、「消費組合の仕事」を切り詰めるを得なくなつて、もはや運動の主體的な担い手にはなれず、啓介を通してしか参加できなくなつたことにいらだちを感じていたのである。ここには啓介の個人的な「夫婦観」の問題にとどまらず、女性がどのように運動にかかわるべきか、というマルクス主義における女性運動家の役割にまで至る大きな問題が孕まれている。

信蔵のところにもフミエからの手紙が届いており、啓介がフミエのかかわつていた「芝居の運動」を理解しないで「邪魔」したことを非難する内容が記されていた。信蔵は、啓介が「夫婦の間柄」を分かつていないと批判する。それに対して啓介は「一ト言も答へることができなかった」のだが、「当時の啓介の頭」にとつては「結婚生活といふものは基本的な積極的意義を持たない、むしろ否定的なもので、性慾の適当な処分、婦人や子供に理解を深めるための方便、妻といふ一人の女の教育、また妻を通じて女性に近づいて啓蒙するための手段としか考へられなかつた」という。啓介を叱責する信蔵は、「今こそ最後のとどめを刺すべきとき」だと思つたのか、「不意に居ずまひを正すやうにして」発言する。

「そいでお前これからどうするつもりぢや。これだけこ

りたからにやア、人間らしい道を踏んで行かうといふ決心だけは据つとるんぢやらうな。」

「どこまでも運動します！」

と啓介は跳ねかへした。勝ち誇つてゐた信蔵が呀ッと蒼ざめて死んだやうな眼球で彼をみつめたまま呆然自失してゐるのを見ると、啓介の胸には此の当然の決意がはげしい現実的なものとして表面にあらはれてきた。

啓介の「どこまでも運動します！」という言葉は、中野重治「村の家」（『経済往来』第一〇巻第五号、一九三五年五月）の主人公勉次の「よくわかりませんが、やはり書いて行きたいと思ひます」という決意の発言を想起させる。両作品に共通するのは〈転向者の再転向〉（本多秋五）をモチーフにしている点であるが、「帰郷」の場合、革命を志した無産主義運動家が直面させられるのは共同体の封建的な旧弊だけではなく、「太古からの旧家」に流れる「毒血」——信蔵は啓介に「お前の頭は遺伝とやらで、一たんよくなつても、一生役に立たんぢや。医者がちやんとさう云ひよつたわい」と詰め寄る——であつた。信蔵によれば、信蔵の弟謙二は「便所の中で脱腸した腸を剃刀で切つて自殺」した。謙二の息子栄一は「十六のとき気が変になつて少しも眠らないで真裸であばれて、大声で活動の弁士の真似をして疲れきつて死んでしまつた」。S島H村の内田家といへば、今でこそ見るかげもないが「部落総代」を歴任した「昔からずつと聞こえた

名家」であつた。この「毒血」こそ啓介が発狂することになつた真の原因——「あらゆる予想を越えたおそろしい現実」——として明らかにされることになつたのである。

ところで信蔵がF病院に見舞つた啓介の「瘦せた脚」には「なにか不気味な傷痕があちこちにあり、なかには血のにちんだまなましものもあつた」。それらは啓介が精神錯乱して自傷行為に及んだときのものであつたのか、取り調べの際の激しい拷問によるものであつたのかは明らかにされていない。「帰郷」が執筆された時代背景を考えみれば、特高警察による拷問や独房での拘禁などが精神疾患を悪化させた原因として考えられるのだが、検閲を意識してのことか、それらにはほとんど触れられていない。「帰郷」では、精神の健全な発達を阻害させたものとして信蔵による強迫的な家庭教育があげられ、発狂に至らせた決定的な原因として遺伝的特質が設定されている。しかしこのやうなとらえ方では、人間の主体性を信じて社会構造の是正を目指したマルクス主義文学が克服しようとしたはずの、遺伝と環境を人間理解の根拠におく宿命論的な語りになつてしまふ。それは、村山の転向小説に關して本多秋五が「転向を制作動機としながら、作者の身上を遠ざかつた題材のものが相当数あり、そのなかには逸品もあつたが、それらは風俗小説への急傾斜をはらんでいた」と指摘したことに通じる³。少なくとも作品のレベルでは〈転向者の再転向〉とは安易にいえない側面が存するのである。

4

繁樹の将来を案じて、繁樹をフミエのもとに預けるのが得策であると考えた啓介は、フミエに手紙を書く。しかし転居先不明のために配達に時間がかかった。フミエからの返信には、繁樹を引き取ってもよいという返事が記され、「十円を同封します。一日もはやくおいでを待ちます」と走り書きされていた。啓介の頭にはフミエへの「復讐」も思い浮かぶのだが、とにかく今晩にも発つて繁樹を連れてフミエのいる大阪にゆこうとする。フミエがどのような生活をしているのかは分からないものの、現在のフミエが啓介と繁樹を必要としていることだけは伝わってくる。読者には、新しい共同生活がはじめられ、フミエが啓介の再起を助ける役割を果たすかもしれないと予感させる。しかし啓介は繁樹に向かって、「お父ちゃんはな、謄写版を一つ手に入れんとならんのだ。いいか、このことを誰にも云うでないぞ。最高幹部に知られたら大変だ。お前だけで心にしまつとくんだぞ」という。「最高幹部に知られたら大変だ」は初出時にはない一文で、「啓介の狂気という大事なモメント」を確実なものにするために、単行本化される際に追加された。啓介の発症を知らないフミエが啓介との生活を再開させたとしても、実際には、多くの困難がともなつたにちがいない。

二 「何田勘太シヨオ」

「何田勘太シヨオ」は「新潮」第三二年第八号（一九三四年八月）に発表された。「チミな良心的な運筆な小説家」である小説家深井整三は、「何田勘太シヨオ第一回公演」を観るために日の出館を訪ねた。河田はタン・モカール座を飛び出して自分の「レビユ団」を旗揚げしていた。公演の内容は、七年間大学に在学していたときに三〇円借りた親友に、「大学は出たけれど職の見付からない」河田が偶然再会する。このストーリーにギャグを混ぜた「レビユ喜劇」である。

公演が終わって場内が明るくなると、深井は「鼠のやうな小さな男」である町村が傍らにすることに気づいた。四年前「或る組合のさうさうたる闘士」であった町村の「態度は慇懃だったがハチ切れるやうな、また犯すべからざる鋭さ厳しさがみなぎつてゐた」。深井は「シムパとして間に二段ほどの人間を入れて町村の指令のもとに動いていた。深井にとって町村は「絶対的な存在」であった。二人はほとんど同時に検挙されたが、深井は「ただシムパだつたし、芸術家だつたし、あやまつたし、起訴保留で出された」のに対し、町村は「深井たちのことを最後まで包んでゐた」ために「三年半のうちに四ヶ月前に出てきた」のであった。

深井は「町村の前に自分を有罪と感じてゐた」ことを考えれ

ば、二人の關係は「昔の方向をむしろ倍加すべき筈」だったのに、現在はそれが「逆転」してしまっていた。出所して三カ月間の「あらゆる奔走にもかかわらず何の職も得られなかつた」結果、町村の「あのひ弱い、子供のやうな細君」は一カ月前から紙芝居をはじめていた。しかし「ちよつとした事があつて車をすつかり叩きこはしてしまつた」ために紙芝居もできなくなつた。映画従業員組合と「間接的な關係」のあつた町村を通して、町村の妻が「何田勘太シヨオ」の脚本を引き受けるようになったのである。

町村は「永い刑務所生活で疲れた身体で土方までやつたが二日で倒れたことなども話のはじめに口を滑らした」。しかし深井が支援しようとしても町村は「理由のない金はどうしても受け取らなかつた」。「これが以前、深井の責任になつてゐた資金をキチンと納めないと嚴重に譴責してよこした町村であらうか」と感じるのだが、「いや、さうであればこそだらう」と思いをあらためる。深井は「胸を打たれた」。深井が日の出館に呼ばれたのは、何田に「文士」の深井を推薦し、深井に「レビユウ喜劇」の脚本を書かせることによつて、「町村を何田にとつて何か意義のあるもの」にしようとする町村の思惑によるものであつた。しかし作品の最後で、娯楽映画製作会社の喜劇役者小早川輝景が不意に訪れて、何田を「相当の給料」で雇うという話を持ち込む。その結果、折角旗上げした何田の「レビユウ団」は一週きりで潰れてしまい、何田以外の役者たちは「再び路頭に

迷ふ」ことになる。

「レビユウ喜劇」といつたモダン風俗をからませながら、出獄後厳しい生活を強いられている運動家の夫婦が描き出されている。

三 「椿の島の二人のハイカー」

「椿の島の二人のハイカー」は「文藝春秋」第一二年第八号（一九三四年八月）に掲載された。一見ハイカラなタイトルの小説であるが、敗北感にとらわれている住吉と加島が過去の失敗を振り切るために、大島への一泊旅行にでかけるという物語である。日曜ごとに計画されたハイキングは、住吉にとつては「一年がかりの懸命な恋愛の破局のもたらしたうろな生活を救ふ唯一の手段」であり、加島にとつては「今、或る莫大なものと引換えに「生れて初めて人生を享樂」しつゝある」ゆえに「享樂は瑕瑾のない底のもでなければならぬ」と考えられていた。住吉と加島は三年前までは一緒に「文学団体の中の青年の組織」で働いていた。三年前、住吉は乾性肋膜炎に罹つて帰郷を余儀なくされた。住吉は静岡の古い葉屋の三男であつた。一年前に再び上京した後に、深川の古い紙屋の二女の蘭子と恋愛をはじめるが、「池袋に或る特殊な女学校を経営してゐる婦人界の名士」である叔母が「まづ一族を業に關係のある商売のもの」で固めて相互に扶助し地盤を拡げやがては合名又は合資会社に

しなければならぬ」と猛反対した。「叔母の女学校の英語教師」に採用されて「今迄悩んでゐた生計の問題が永久に解決」したと思つていた住吉には、蘭子と「駆落」する勇氣はなかつた。

他方、現在は東京で「或る興信所の社員」をしてゐる加島は、「三年前までの事はもちろん、運動に關したことはフツツリと彼の口から絶えた」。「まるで生れつきの会社員のやうに、月賦でしやれた洋服をつくり、月給日にはひげ天の天婦羅か漬物の小料理を食ひ、たつた一軒の知り合ひの待合のおかみの機嫌を後生大事と取り結んでゐた」。加島は五年前、まだ中学校を卒業したばかりであつたにもかかわらず、郷里の秋田で農民組合運動にかかわつて「一年牢屋に這入つた」。「その当時から加島に対する尊敬の念は現在の加島がどうあらうと住吉の心から失はれてはゐなかつた」という。

住吉と加島が「一とすべり二十銭の三百メートル余りの木の滑り台」で遊んでいたとき、偶然加島は、滑り台の左側に沿つて歩いていた篠木と川端を発見し、「驚愕した顔」になる。急に予定を変更して三時の汽船で帰るといひ出し、タクシーを拾つて行つてしまふ。訳の分からないままひとり残された住吉は、入江まで歩くと、「不思議に独創的な形の海水着を着た女達」がいることに気づく。一〇銭出せば魚を釣つてきてやろうと話しかけてきた「平べつたい顔をした十二三の男の子」によれば、「一樣に真白で、右肩だけで釣つてある」水着をつけたのは「朝鮮人の女」たちで、道路工事で働く「男の人たち」が「きつと

そいで食へねえで女の連中あわびとつてんだらう」という。

波浮の港を見渡せるところにまで歩いてきた住吉の肩を、不意に篠木と川端が叩く。彼らは出獄してからまだ半月にならぬといひ、「出獄祝ひ」として仲間からもらった「救援金」を使って旅行に来たという。三人はボートに乗つて話していると自然に加島の話題になる。篠木と川端によれば、秋田で一度検挙されていた加島は、今回逮捕されると「再犯」になつて起訴が逃れられないことが分かつていたので「急にこわく」なつて、仲間を「売りやアがつたんだ」という。加島による密告のために仲間捕らわれ、篠木と川端は二年間服役させられることとなつた。

しかし住吉は「加島のしたことの恐ろしさ」に「戦慄」させられたものの、「加島との日曜ごとのハイキングを、では断はつてしまはうといふやうな決定的な気持は起つてはこなかつた」。「度はづれの酔つぱらつたやうな享樂への粘着」は「友を売り主義を売つたことの代償として得た享樂であつたがゆゑか」、また「ハイキングを楽しんでるのは恐ろしい東京を一瞬でも離れることのうれしさからか」は分からなかつたが、住吉にとつては「やはり篠木と川端に対すると同じやうななつかしさ」が「心の中の加島から消えてしまひはしなかつた」のであつた。なぜなら住吉も蘭子との結婚を阻止されたという敗北感に打ちひしがれていたので、1、情勢が急激に変化した。2、肉体が駄目だ。3、心情がデリケート過ぎる」という三カ条を「自分自身への言ひ訳け」としていつも用意してゐた。

いま自分は自分に対して何の無理もしてゐない。成程自分は今何も社会的に役に立つことをしてはゐないだらう、しかし同時にまた誰にも迷惑をかけてはゐない、どころか自分はおかしくして慎しく自分の空虚とたわむれることによつて一つの美しく柔かな感性を自分のうちに育み築きつつあると思はれる。そしてそれは美しく柔かな微光を私のまわりの人々に投げかけ滲みわたらせるだらう、これもまた一つの良いことであらう、私は悲しむ必要もなく、あせる必要もなく、自らをおとしめる必要もない――

敵しい自己否定の後に続く、恢復のためのモラトリアム――心のなかにわだかまる空虚感をどのように克服すればよいのか、〈敗北の季節〉のなかで身動きのとれない若者たちの姿が印象的に描かれている。

注 村山知義の作品の本文は、『白夜・劇場』（一九三五年五月、竹村書房から引用した）。

(1) 榎原修「転向小説と転向文学論——「白夜」をめぐって——」（『国語国文論集』第二〇号、一九九一年三月、一七五頁）

(2) 新宮一成『夢と構造——フロイトからラカンへの隠された道』（一九八八年三月、弘文堂、二二七頁）

(3) 同右

(4) 本多秋五『転向文学論』（一九五七年八月、未來社、一九一頁）

(5) 村山知義「帰郷」の批評評」（『文芸通信』第二卷第八号、一九三四年八月、三五頁）

〔おにし やすみつ 本学教員〕
(以下、次号)